

(別紙2)

審査の結果の要旨

河東仁氏の「日本の夢信仰——宗教学から見た日本精神史」は、記紀から江戸時代の文芸作品に至るまでの資料を読み込み、夢の神秘的な機能に対する信仰がどのように変遷してきたかを展望しようとしたものである。河東氏は古代の日本には、夢から神意を得るという信仰と、夢において魂の往来ができるという信仰があったとする。氏はこれをシャーマニズムにおける憑依と脱魂の宗教体験に対応するもので、諸原始＝古代文化に共通に見られるものととらえ、「原＝夢信仰」と名づける。もっとも高い位置を与えられる場合、「原＝夢信仰」は国家の運命を決する公的機能を果たすものとして記録された。

王朝期の物語や日記文学になると、参籠して霊夢を授かったり、夢の宗教的な解説に意を凝らす「夢解き」など日本独自の夢信仰がふんだんに見られるようになる。それは素朴に夢のリアリティが信じられていた時代から、中国思想、陰陽道、仏教の世界観などの影響の下で夢の機能が相対化される一方、その後の日本文化に大きな影響を及ぼす新たな夢信仰のパターンが形成されていくプロセスである。王朝期を通して「夢の世」のはかなさを詠嘆する「王朝人の夢信仰」と「予兆夢」「入胎夢」「往生夢」「修行夢」などの「仏教的夢信仰」がからまりあいつつ、次第に後者へと重点が移動していくという。

『源氏物語』『更級日記』においてと同様、聖徳太子信仰や明恵・法然・親鸞の信仰世界においても、夢が人生の決定的な転換に関わるものとして重視されており、この時期に至るまで「夢見文化」といった共通の基盤が継続してきたと論じられる。また、それらが中国の夢信仰や仏教教理の中の夢の位置づけとどのような関わりがあるかも示され、本覚思想に代表される日本的な仏教のあり方や無常観と区別される無常感と、日本の夢信仰との間に密接な連関があることも示されている。

従来の研究では、王朝期以降、武士の時代に入ると夢信仰は衰えていったとされるが、河東氏はこの通説に疑問を呈する。『平家物語』や『太平記』においても、生死の境を生き抜こうとする武士が実は夢信仰に多くを託そうとしていたことが示される。夢信仰の衰退を確かに指摘できるのは、むしろ戦国時代以降であり、長実房英俊の夢日記はそれを如実に示している。西鶴に代表される江戸時代の娯楽文学の中の夢はその流れの延長上に位置づけられるが、上田秋成と曲亭馬琴において新たに夢の神秘性が再興される。しかし、それは生きた夢信仰の中で創作した世阿弥の「夢幻能」の世界の「幽玄」とは異なるもので、西洋のロマン主義に対応するような新たな「神秘」の幕開けであることが示唆される。

西郷信綱の古典的な業績、『古代人と夢』(1972年)を初めとして、日本の文学作品や宗教・歴史資料の中に現れた夢についての研究の蓄積は膨大だが、河東氏はそれらの多くを踏まえ、それらに学びつつ、新たに宗教学的な観点から「夢信仰」の変容の過程として理論的見通しを立てるという力業をなしとげている。古代から近世までの文学作品や宗教・歴史資料に広く目を配り、諸資料の歴史的(宗教史的・文学史的・思想史的)文脈を踏まえた上で、同氏なりの日本「夢信仰」史の構想の上にて的確に位置づけることに成功して

いる。

もっともその「夢信仰」史の構想がどれほどの確なものであるか、なお検討の余地は残るし、もっと重視されてよいのに十分に取り上げられていない資料もある。さらに個別の資料の読み込みや相互の関連づけという点でも、なお諸処に再検討の余地はある。とはいえ、エリアーデらの宗教現象学の伝統に通じる壮大なパノラマ的研究であり、夢信仰の宗教学的的研究として多くの新しい貢献をなし得ているし、日本精神史研究の掘り下げの試みとしても十分に水準に達している。

よって審査委員会は本論文が文学博士の学位を授与するにふさわしいものと判断する。